

令和元年6月19日現在

機関番号：21401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2018

課題番号：15K12859

研究課題名(和文) 米国における苦学生の実態的研究 明治期から大正期にかけて

研究課題名(英文) Self-supporting Japanese Students In the US- From Meiji to Taisho period

研究代表者

加賀谷 真澄 (Kagaya, Masumi)

秋田県立大学・総合科学教育研究センター・准教授

研究者番号：70635044

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：平成27年度から30年度にかけて、アメリカの大学機関に調査に赴いた。イェール大学、ハーバード大学、ボストン大学に赴き、教員・図書司書から協力を得て必要な資料を集めることができた。その過程で本研究に近いテーマで研究している日米の研究者と知り合い、平成30年度にボストン大学へ visiting researcherとして着任する道へとつながった。

平成30年度には、ウェルズリー大学、シモンズカレッジなど、女子大にも調査範囲を広げ、1800年代後半から日本人女性が留学していることを確認することができた。このようにして収集した資料をもとに、当時の日本人学生の生活状況を口頭発表の形で公開している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、1900年代に起こった渡米ブームの中で、学問を修めることを目的として渡米し、働きながら大学生活を送った日本の若者たち(とりわけ東部の大学で学んだ勤労学生たち)について、大学の在籍登録者名簿をもとに、彼らの留学の目的、修学過程、在米生活の様子を明らかにすることを目的としている。この研究により、明治期から大正期にかけて一般庶民の中に生じた上昇志向 社会的成功を目指す庶民によるムーブメント を、日本の近代史の中の一つの流れとして掴むことができると考えている。また、現地調査により短期間留学していた日本女性も見つけることができた。女性の教育史という観点から、重要な発見ができたと考えている。

研究成果の概要(英文)：I have been to the United States' university institution for investigation from 2015 to 2018. I went to Yale University, Harvard University, and Boston University, and I was able to collect necessary materials with the help of the teachers and librarians. In the process, I had an good opportunity to become acquainted with Japanese and American researchers who were researching on the subject similar to this research, and these encounters led a way to my becoming a visiting researcher at Boston University in 2018. The scope of the survey was extended to women's colleges such as Wellesley College and Simmons University in 2018, and we confirmed that Japanese women had studied abroad since the late 1800's. Based on the materials collected in this way, the living conditions of Japanese students at that time are released in the form of oral presentations.

研究分野：比較文学

キーワード：Japanese student self-supporting student Meiji Taisho Harvard University Boston University Wellesley College Simmons University

1. 研究開始当初の背景

1900年代、「渡米の手引き書」がブームとなり、同じ時期には、「苦学」「立志」「成功」を掲げる雑誌も続々と刊行されていった。それらの読み物は、社会の中層から下層の若者に訴えかけるものであり、その指南を頼りに、実際に行動を起こす者も現れた。しかし現実には、苦勞してアメリカへ渡ったものの、出稼ぎ人と変わらぬ生活を送り、学業を諦め、酒や賭博に溺れてしまう者も少なくなく、そのような「墮落」学生は、「ごろつき」と呼ばれ、新聞、雑誌、小説の中でネガティブに描かれた。彼らの中には、より生活条件が厳しい東部へ渡り、大学で学位を取得した成功者もいたが、その数と留学生活の実態は十分に把握されているとは言い難い。

彼らが新聞や小説などで、時には悪く描かれ、時には「海外雄飛する青年」としてもてはやされた背景について、その歴史的・社会的意味を解明したいと思ったことが研究のきっかけである。

2. 研究の目的

本研究「米国における苦学生の実態的研究 明治期から大正期にかけて」は、明治中期、資産を持たない若者たちに留学を呼びかけた渡米関連の手引き書や、雑誌『力行』などの「苦学」を推奨する雑誌が、どれほど彼らに影響を与えたのかを分析するとともに、実際に渡米した私費留學生の実態を明らかにする。

また、渡米した苦学生たちが、「海外雄飛する青年」として、新聞・雑誌に報じられ、あるいは小説に描かれるようになっていったことについて、その歴史的・社会的意味を考察する。この研究により、明治期から大正期にかけて一般庶民の中に生じた上昇志向 社会的成功を目指す庶民によるムーブメント を、日本の近代史の中の一つの流れとして提示することができると考えている。

3. 研究の方法

調査の第一段階としてアーカイブの資料を収集した。平成27年度から29年度にかけて、アメリカの大学機関や公立図書館などに資料調査に赴いた。

イエール大学、ハーバード大学、ボストン大学では、教員・図書司書から協力を得て必要な資料を集めることができた。実際にボストンへ行ってみると、ボストンでは明治時代から大学を超えた日本人学生の交流組織があり、そのオリジナルの記録が1908(明治41)年からボストンの現日本人会に残されていることが分かった(三好彰「ボストン日本人学生会の記録」『東日本英学史研究』第12号には、その詳細が解説されている)。

また、ボストン大の学内からアクセスできるデータベースから、明治期のハーバード大やタフツ大などの日本人留學生についての研究レポートや冊子など、アーカイブを確認することができたのは、非常に大きな収穫であった。

調査を続ける過程で、明治・大正期の日本人留學生について、まだ知られていない資料が存在すると推測されること、そして調査にはもっと時間が必要であることを感じ、平成29年度に入ると、ボストン大学に客員研究員として赴任する希望を所属大学、ボストン大学に提出した。

平成30年度にはボストン大学に着任し、研究ができることになった。ボストン大学の文化人類学の教員と連絡を取る中で、近い内容の研究をしている日米の研究者とコンタクトを取ることができ、研究へのアドバイスを得ながら研究に必要な文献・資料を渉猟した。

大学図書館、公立図書館、米国国会図書館、インターネットソースから集めた資料から当時の日本人学生の生活状況を分析し、その結果を平成 30 年度、アメリカ南部ブロック開催の Asian Studies Conference で口頭発表している。

4. 研究成果

研究の根本的な姿勢は、ある文化・文学の事象を文化的・文学的な文脈のみで捉えるのではなく、歴史的な側面から見直すことで、それらがなぜその時代に生じ、注目されたのか見直そうとするものである。したがって学際的なアプローチが必要となるが、研究をする中で以下のような成果が得られた。

1)客員研究員としてボストン大学に赴任したことから、人的ネットワークという点において日米の様々な分野の研究者たちから助言を得られるようになった。また米国において Asian Studies Conference で発表したか、南部の研究者たちから有益な助言（南部の大学の記録と接続して研究するなど）を得た。

2)収集した資料そのものが大きな価値を持つものである。それらの中には、ウェルズリー大学やシモンズ大学といったボストン近郊の女子大の学籍簿やスクールハンドブックのコピーがある。日本女性の留学生は、著名な人物を除いて分析が進んでいない。私が調べた限り、学位取得に至らなくても、一年の留学、聴講生となっていた日本人女性が複数いることが確認された。これらは明治期の新たな女性像として重要な資料となるだろう。ボストンの女子大についての調査は着手したばかりだが、今後も引き続き研究を進めたいと考えている。

本研究は、最終的に、「上昇を目指す庶民史 明治から大正にかけて」というテーマで書籍化したいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

1)加賀谷真澄「ある渡米苦学生—力行会からの発見」『近代文学資料研究』第2号(近代文学資料研究の会)2017年(3~18ページ)

〔学会発表〕(計 6 件)

Shohei Watanabe, Masumi Kagaya 「Can hard –Working Students of the Past be Role Models for Students of Today?」

IAEVG International Conference 2015, 2015年9月21日(於: Congress Center, Tsukuba)

加賀谷真澄「明治が見たビクトリア朝の貧困—挿絵を通して」日本英文学会東北支部第71回大会、2016年11月19日(於: 秋田カレッジプラザ)

加賀谷真澄「貧民の空間—明治の貧困表象」2017年日本比較文学会東北支部大会、2017年11月11日(於: あきた文学資料館)

加賀谷真澄「ある渡米苦学生—『力行世界』からの発見」(「1945年を跨境して—アジアにおける英米文学教育のジオポリティックス」(日本学術振興会科学研究費 基盤研究(B)研究課題番号16H03392)第一回研究集会招待講演、2016年8月28日(於: 筑波大学東京キャンパス)

加賀谷真澄「米国における苦学生の実態的研究—明治期から大正期にかけて—」秋田県立大学地域連携・研究推進センター主催、秋田県立大学部局間研究フォーラム、2016年9月2日(於: カレッジプラザ)

Masumi Kagaya 「Japanese studied in the USA - from the end of the 19th century to the beginning of the 20th century」(The Southeast Regional Conference of the Association for Asian Studies 2019, 2019年1月19日(於: Rhodes College, Memphis))

〔図書〕(計 1 件)

1) 松田幸子・笹山敬輔・姚紅編著『異文化理解とパフォーマンス—Border Crossers』(春風社) 2016年(共著:、担当箇所:加賀谷真澄「桜田文吾『貧天地飢寒窟探検記』の貧困表象」(162~179ページ))

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年:
国内外の別:

○取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加賀谷 真澄 (Kagaya Masumi)

秋田県立大学・総合科学教育研究センター・准教授

研究者番号: 70635044

(2) 研究分担者

江口真規 (Maski Eguchi)

秋田県立大学・総合科学教育研究センター・助教

研究者番号: 30779624

(3) 研究分担者氏名

セン ラージ ラキ (Sen Raj Lakhi)

所属研究機関名: 秋田県立大学

部局名: 東京外国語大学・特任助教

研究者番号: 20795611